<table>
<thead>
<tr>
<th><strong>Title</strong></th>
<th>Development of Medical Interpreting in the United States</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>Author(s)</strong></td>
<td>竹迫, 和美</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Citation</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Issue Date</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Text Version</strong></td>
<td>ETD</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>URL</strong></td>
<td><a href="https://doi.org/10.18910/33997">https://doi.org/10.18910/33997</a></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>DOI</strong></td>
<td>10.18910/33997</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>rights</strong></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/

Osaka University
論文内容の要旨

Development of Medical Interpreting in the United States（米国における医療通訳の発展）

学位申請者 竹迫 和美

都小形化の進展とともに国境を超える人の移動は活性化し、言語や生活習慣の異なる人々が共存する方策が求められている。医療現場では、診断や治療について医療者と患者との間の正確かつ迅速なコミュニケーションは必須と考えられるが、医療通訳者が必要である事実が確認されている。本研究において、医療通訳者の歴史が古く、連邦法に基づいて無料で医療通訳サービスを受けられる米国における医療通訳の発展の過程を明らかにした。

第1章では、日本と世界の概況を述べる。日本では、1990年の入管法改正以来定住外国人が増加し、近年、観光客が急増している。当通訳者を担当する医療通訳者の専門化は急がされている。自治体の中には、国際化を進めている自治体が増えている。他方で医療通訳者の役割は不明確な場合がある。他方で医療通訳者の役割は不明確な場合がある。他方で医療通訳者の役割は不明確な場合がある。他方で医療通訳者の役割は不明確な場合がある。

第2章では、医療通訳を医療現場のコミュニケーションと捉え、主として米国における先行研究を分析した。その結果、医師、言語や文化障壁の設定、医師の医療へのアクセスの欠如、医療通訳サービスの課題など多岐に亘り膨大な研究論文を蓄積してきたことが明らかになった。これら医療論文の中には、医師の視点から課題を分析したものが大半であり、現場の実感である医師通訳者は調査対象者ではあったが、医師通訳者自身による研究は殆どない。他方、医療通訳をコミュニケーション通訳の一環として位置付ける国が多いことから、主として言語学者や通訳研究者による先行研究を数多とした。医療現場の的確な分析は主体であり、発展の経緯を示すにとどまっている。そこで、米国における医療通訳者の役割をより深く理解するため、医師通訳者を含め、ステークホルダーを発展の枠組みに位置づけることを課題と考えた。

第3章では、調査方法を詳細した。研究は、歴史学、人文学、社会学など多岐に亘る研究者に実証的で研究に利用してきた手法である。他方、研究者は、多数の歴史的資料に照査した記録や、発行が学習課題の一環として家族のCHを考え取って記録した資料なども無数にあることから、応用性の高い手法と同様知られる。本研究では、医療通訳者として医療通訳者に至る過程を経験するまで個人を取り巻く私的領域まで踏み込んで調査を積み、分析する手法として、医学化が選択した。研究倫理に関する記述資料が希少であるため、まず、職能団体の創設メンバーを探し、残存する資料を入手し、同時に関係者を紹介してもらい、出身国やエスティティなどが多岐に亘るよう配慮しつつ、対象者数を増やした。録音したインタビューのテープ起こし作業や作業段階まで全期間に亘り、対象者と情報交換を繰り返し、調査に情報の確認作業をした。研究手法の選択として批判される記憶の曖昧さや説明の可能性をできる限り排除するため、同様の来事について数の関係者に確認し、一次資料との照合を行い記憶の確認作業を行った。

第4章では、本研究で行ったがの結果を示した。1970年から2013年を調査対象期間として、各対象者の就業開始時期に注目し、時系列に従って医療通訳者の歴史を構成した。合計29名の医療通訳者の出身年は28歳から25歳までの話者であった。クメール語やモン語、チンピラ語、メスワール語、先住民族のナハラ語、などの言語の話者も含めた。移民出身者が14名、難民後出者が5名、入処者が15名、そのうちアメリカ人の配偶者が7名、遺留学習者者は6名であった。8名は病院の初代医療通訳者となり、院内通訳サービス推進の中核的役割を担い、バリンガルスラップやボランティアの教育通訳として利用するために注力したことが語られた。10名は、医療通訳サービス部門の部長やコーディネーターなど管理職に就いた。医療通訳のコストは政府でなく医療機関が負担されなければならない。医療機関が最も利用したい医療通訳者を、通訳費用のコスト削減に配慮を経た。17名は、専門研修の講座としても就業していた。職能団体の創設メンバーであった6名、いわゆる医療通訳者の通訳困難な事例や職務での課題を語る小規模の会合が第3回に職能団体へと発展した経緯が語られた。職能団体は倫理規定や行動規範といった技術的規律を出
版、医療 Clown として必要最低限の要件を定めた。地位向上や雇用機会増大などアドカシー（地位確立の運動）のため、多岐に亘るスカークールナーと協力する際には、運動の奉仕役も果たしたことが語られた。医療通訳士を職業選択した動機は自らのエスカレータルーツ、家庭環境、言語文化障害の体験など多岐多様であったが、実践者としての一義的役割は、医療者と患者のコミュニケーションの橋渡しをすることであり、「患者の役に立ち、労いの言葉を聞くことに至福の喜びを感じる」という宗旨の思いを表象していた。創始期には、社会全体として医療通訳に対する理解が乏しく、病院のスタッフ、特に医師が医療通訳士の利用に難色を示したが、各対象者の不断の努力で、信頼を勝ち得た経緯も語られた。

第5章の考察では、まず、公衆衆運動の高揚と暴力闘争の生々しさに囲まれ、社会的価値観の変容を決定付けて点を注目した。この章のOHからも、アジア系、スペイン系、先住民族の団体が主導し各地域でアドカシー運動が急速に進化したことが明らかとなった。少数族間に内乱した相違に対する懲罰が、黒人の市民運動を核に結実し、公平的サービスへの平和な権利を主張する運動として展開し、医療ケアに対し平和な機会均等を担保する手段として、医療通訳サービスが重要視されるに至り、多くのスカークールナーが活躍に積極的に尽力した。加えて、1970年代難民・移民の急激な流入の時期と、米国全土で医療通訳の社会問題化した時期が重なったため、医療関係者及び、インフォームドコンセントのため医療通訳が重要だという認識が広まった点も指摘した。

次に、この章のOHでは、先行研究の一部を挙げて、スカークールナー毎に役割を考察した。連邦政府は、大統領令などを法制化を通して、州政府に遵守を求める、健康福祉省の下に公民権団体と少数族間保障団体を設け、州政府は、医療通訳サービスの提供に関しては校地制度を設けた。しかし、法律の文言に目を向けると、スカークールナーなどが、通訳を利用してと定めているのに対し、米国は、差別反対の立場から、医療ケアに対するアクセスの確保を重視している。つまり、アクセスが確保できれば、専門の医療通訳士ではなく、バイリンガルスタッフやボランティア通訳でもよいと定めている。その意味で、米国においては必ずしも、医療通訳士の職業のステイタスが確保されたとは言えない。反面、連邦政府や州政府の命令は医療通訳の雇用増大につながったことはOHから明らかになった。医師や研究者は、医療通訳に関して黒人の多岐に亘るテーマで科学的な根拠となる研究論文を執筆し、言語と文化障壁の問題を高める政治者や基金団体に示しながら提案を果たした。また改革を進める職能団体や政治団体と、市民が州法制度の運動を促進した医師がいた。発言権のある医師が医療通訳の重要性を指導し、周りを説明し役割が大きい。基金団体の下には、ヘクサゴンの医療ケアの格差を問題視、医師を通じて医療通訳の発展プロジェクトに参加した多くの基金団体が提供した団体もあった。彼らが資金面で米国の発展を支えたことは、他国と比較して米国の特徴と言える。職能団体が、アドカシー運動を主導し、認知制度を独自に構築したことは特筆に値する。実践者の知見を結集する技術的な課題を克服する役割も担った。また、成果においては、倫理規則や行動規範など実践に必要不可欠な規範を策定し、医療通訳士としての一定の基準を設定する役割を果たした。米国の医療の発展の技術的な基盤は、職能団体によって構築された。創始期には、主として米国が主導して基本的な枠組みを構築した。その後、英語を習得した難民・難民出身者が組織の中核に加わったことで、文化に配慮した医療通訳を一貫して推進するようになった。

他方、個人の貢献が顕著にあらわれ、特に移民や難民出身者からの社会的背景の違いや言語の希少性を活かせる職業として医療通訳士を選択し、彼らが、積極的に医師と患者の文化的差異を乗り越えて果たした点も明らかになった。また、対象者が共通点としては、医療通訳を拒絶しながらも医師に医療通訳の重要性を認識した点を挙げることができる。彼らが、院内を問わず、専門研修の講義になり、その後教育したことも、その後の発展を支えた。

本研究では、米国の発展において、枠組みの構築、市民からのエンパワーメントや、職能団体による倫理規則および行動規則の制定やアドカシー運動の推進など、多面的なスカークールナーの協力のあった要因が大きく作用し、互いの相乗効果で、医療通訳士の社会的認知が進んだことが明らかになった。創始期の実践者の多くの、引退後情報が不明となり、当時の史料の大半が失われている状況下、自分たちの声を後世に残してほしい旨、インタビューより者や情報提供者からの強い要望があった。各対象者の言語において、職業に対する思い入れや医療通訳士を職業として選択に至った背景やどのように現場の課題を克服したかなどが具体的に語られている。英語で記述することによってのみ、彼らの願いに応え、同時に、医療通訳サービスに携わる多くの関係者や今後医療通訳士を目指す者もこれからの貴重な知見を共有できると考えた。

萌芽期から現在までの医療通訳士の語りを基に通史的に論述した本研究は、米国においても通訳の発展の要因の分析において新たな視点を提供することができた。医療通訳士の見方でスカークールナーや医療通訳士が実践上の課題を現場でどのように克服してきたか具体的事例も示してきた。日本でも、昨今、医療通訳の仕組みの構築を求める声が高まりつつあるが、多くの実践者が多岐に亘る課題を抱えていると報告されている。日本のみならず、医療通訳の新たな仕組みを模索する国々に対し、実現のための重要な教訓になると期待する。
論文審査の結果の要旨及び担当者

<table>
<thead>
<tr>
<th>職</th>
<th>氏名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>主査</td>
<td>中村 安秀</td>
</tr>
<tr>
<td>副査</td>
<td>千葉 泉</td>
</tr>
<tr>
<td>副査</td>
<td>澤村 信英</td>
</tr>
</tbody>
</table>

論文審査の結果の要旨

グループ化の進展とともに国境を超える人の移動は活性化し、言語や生活習慣の異なる人々が共生する方策が求められている。医療現場では、診断や治療について医療者と患者との間の正確かつ迅速なコミュニケーションは必須と考えられるが、医療通訳者が就業する国は限られている。本研究において、医療通訳の歴史が古く、連邦法に基づいて無料で医療通訳サービスを受けられる米国における医療通訳発展の過程を明らかにした。

第1章では医療通訳に関する日本と世界の状況を概説し、第2章では、医療現場におけるコミュニケーションの課題として捉え、米国における医療通訳の先行研究を考察し、米国で医療通訳士が院内通訳士として雇用され始めた1970年代の創始期から現在に至る過程を追跡することの重要性を指摘した。第3章では、医療通訳士として就業するに至った経緯や体験談など個人を取り巻く私的領域にまで踏み込んで語りを聴き・分析する手法として採用したオーラル・ヒストリー（OH）法の意義と限界について論述した。第4章では、本研究対象となることを承諾した29名の医療通訳士の属性を分析し、個別のOHを提示分析した。29名の出身国は20か国にのぼり、少数言語を含む25言語の話者であり、そのうち移民出身者が14名、難民出身者が5名いた。

第5章の考察では、少数民族内在した差別に対する懸念が、黒人の市民運動を契機に顕在化し、公的サービスへの平等な権利を主張する運動として展開し、医療ケアに対し平等な機会均等を担保する手段として医療通訳サービスが重要視されるに至った経緯を明らかにした。連邦政府、州政府、医師や研究者、基金団体、職能団体といった多職のステークホルダーが、医療通訳士の行動規範や認定制度の発展に積極的に尽力した。特に移民や難民出身者が、文化的背景の違いや言語の希少性を活かす職業として医療通訳士を選択し、彼らが、積極的に医療者と患者の文化の橋渡し役を果たしてきた点も明らかになった。

本研究では、米国の発展において、法的枠組みの構築、市民からのエンパワーメントや、職能団体による倫理規程および行動規程の出版やアドボカシー運動の推進など、多職のステークホルダーの協働といった要因が大きく作用し、互いに相乗効果で、医療通訳士の社会的認知が進んだことが明らかとなった。医療通訳士という職業の創設に関わったインタビュー対象者の多くからは、当時の活動の史料の大半が失われている状況下、医療通訳の発展に関する自分たちの声を後世に残してほしいという強い要望があった。英語で記述することによって、医療通訳サービスに携わる多くの関係者や今後職業として選択する人とも知見を共有できると考えた。

医療通訳士の萌芽期から現在までを医療通訳士の語りを基に通史的に論述し英文で書かれた本研究は、米国においても医療通訳の発展の要因分析に関する新たな視点を提起することができた。また、日本やアジアを含め、医療通訳を発展させたい国々にとって教訓になることを期待する。